

壹

2021·4

風萱集

亀田虎童子

子つばめの親より大き口を開く
難聴の耳掃除せり梅の花
十年も病んでみなされ春暑し
百人が百人マスク我もまた
寒菊に近寄りすぎし吐息かな

松下 道臣

自分視る自分の居りて冬ざるる
眼光の鋭くなりし黒マスク
ボタン孔挺摺りをりて冬に入る
凧の枝から音を挽ぎとりぬ
千円に萬をつけたす酉の市

小島 良子

一つ坂上り下りして春を待つ
夕刊の届く頃合ひ鴉の声
立春のロボット人の声を出す
枯れつくすまでの物音芒原
冬早突つ張り棒の落ちてきて

関 喜久子

鴉騒ぐ暁の満月大晦日
お年玉渡せし子等も皆育ち
賀状来る去年より一人欠けたるも
旧姓で互ひに呼びし初電話
救急車受くる余地なき寒さかな



萱集

進選

地球にも我にも月日冬落暉
尼寺に続く小径や犬ふぐり
絵葉書の花はいろいろ春送る
先客の猫に搔かるる春炬燵
春ぬくし犬の甘えの眼に会へば

千葉 中山 惠子

近隣の軽き槌音寒日和
しみじみと手を洗ふ朝寒の水
植込みにしばしとどまる春の雪
切り取りしアロエに花や今朝の春
輪中村となる故郷や春の川

東京 柳田 秀子

冬鷺や見目も見苦し聞き苦し
大寒や頂蒼き富士を見つ
寒晴や言問橋ゆスカイツリ
臘梅や色香の始め揺るぎなし
春近し野川奏づるサクソフォン

東京 ふなかわのりひと

立春の光の中を歩きけり
佐保姫もふと微睡まん昼下がり
亡き母の箆笥を開き春一日
壁に映る鉢植えの影春めけり
お隣は紅こちらは白や梅薫る

東京 谷田貝順子

寒月光鑿半ばなる小面打つ
旅鳥発ち枯野に青き雨の昼
冴返る御統の星鮮やけし
自画像のゴッホの視線春眠覚む
エプロンと寝間着は派手目山笑ふ

東京 武田 未有

寒鯉の黒光りしてたじろがず
息白し寂びたる街の滑り台
寒雷や軋みて脆きあばら骨
捨舟の葦辺にありて寒鴉
わらんべの雪沓乱れ夕かげり

東京 根來 隆元

下総の貝塚あらは初筑波
神前にカッブ酒あり初詣
数の子も蛸も舶来一の重
白鳥にドッグフードのお年玉
貴景勝のやうな白菜廻し締め

千葉 光成 敏子

幽霊は苦しお化けは酸っぱくて 富田 敏子

現代俳句年鑑二〇二一

三橋敏雄第五句集に、

幽霊を季題と思ひ寝てしまふ 敏雄

がある。なんとも味のある一句。高濱虚子の歳時記には見当たらないが、平成十一年刊の現代俳句歳時記には幽霊は夏の季に、お化けは無季の部に入っている。

まことに蛇足ながら、今年の大学入学共通テストに香川雅信の「江戸妖怪革命」から出題があった。民間伝承としての妖怪—お化け—について香川は、「日常的理解を越えた不可思議な現象に意味を与えようとする民族的心意から生まれたもの」と書いている。

怨念から引き出される幽霊は、古くから伝説や物語などで私達の心に受け止められているし、お化けは様々なキャラクターとして現代に生きている。

掲句は、思いがけないことに此の二者を味覚で分けている。苦い酸っぱいは、いずれも此の世の大事な味と思う。この度は氏の鋭い感覚と遊び心に從って楽しませて頂く。

幽霊に叱られている夢の中 敏子

叱るということは、愛情の証と思う。

「見たこともない梟を匿えり 敏子」もあった。梟は真意とか確信とかいうものだろうか。

幽霊もお化けも梟も、氏には明確な存在なのだと思ふ。

落蟬の翅畳まれて余すなし

澤 好摩

角川俳句年鑑二〇二一

やがて、蟻が一つ落蟬に近づいてくる。

工場や打水のあとかたもなき

好摩

蟬の幼虫は、地中で植物の根から養分を吸って、普通数年かけて地上へ出るといふ。その羽化を見たことがあるが、ゆっくり殻を割って現れた白い翅や体に次第に蟬色が滲んで来るところは感動的であった。落蟬は思いがけぬところに落ちてゐる。短い命を精一杯生きたのであろう。きちんと翅を合わせ、どこか端然としている。

掲句も緩みない詠み方で、落蟬に寄り添うような心遣いが見える。「鶉死して翅拡ぐるに任せたり山口誓子」を思い出す。鶉はシベリア辺りから群をなして飛来する強い鳥だが、今は力尽きて地に横たわっている。翅の乱れも可愛そう。しかし蟬も鶉も従容として地へ還る姿である。

何の工場であろうか。大規模工場ではないように思う。さきほど人が出てきて水を撒いていった。辺りが生き生きと光った。だが炎天下の地はじきに乾いて、もう湿りを残さない。工場は機械的な稼働を続けている。

打水という優しいことが為されて、この工場に親しみを覚える。ポツキリとした句の姿から、辺りの情景が見えてくるように思う。